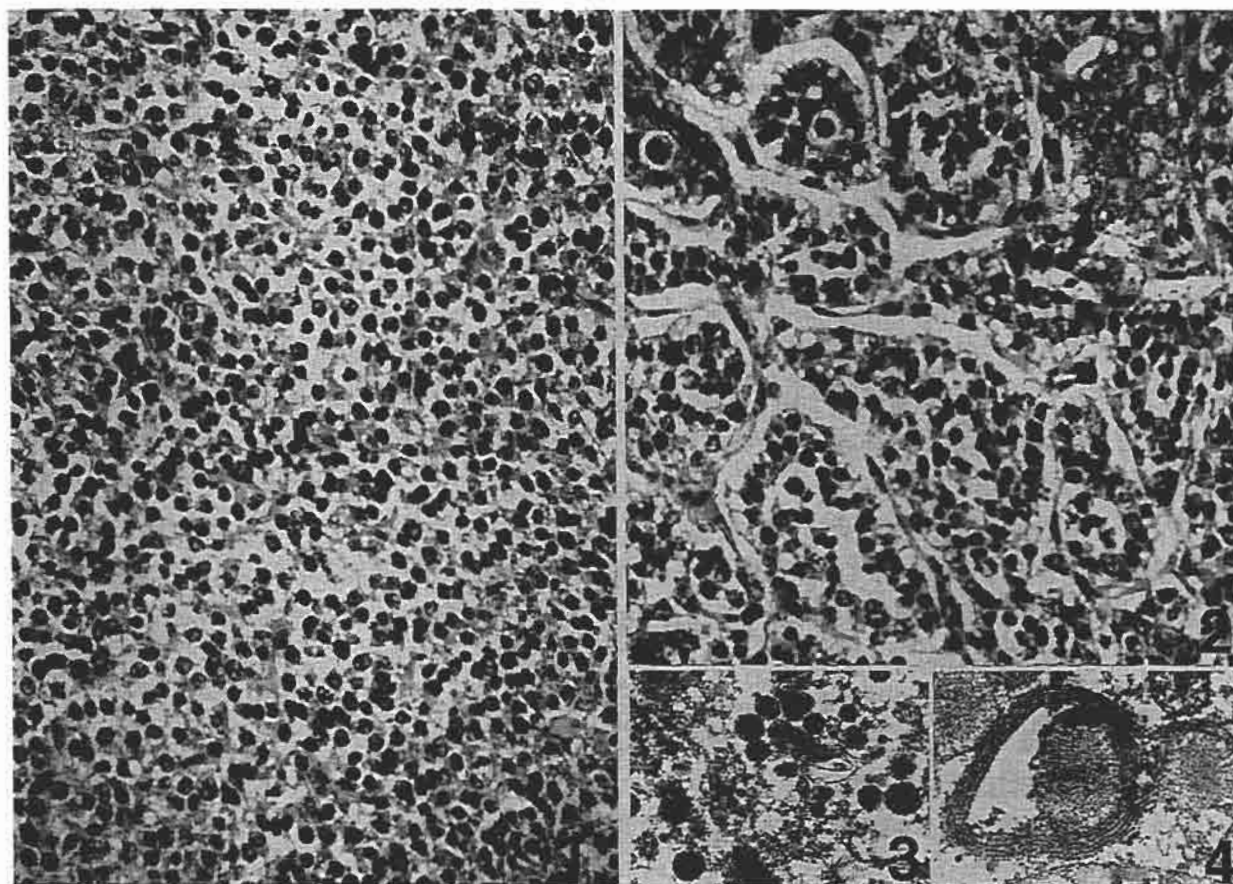


# 犬の眼窩内腫瘍

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第38回獣医病理学研修会標本No.728



動物：犬，ヨークシャーテリア種，雄，6歳，体重5.6kg。

臨床事項：1996年12月20日に右眼の流涙がひどく，右眼が失明したとの主訴で，本学家畜病院に来院した。1997年1月9日に右眼球の突出を認め，MRI検査で脳底部から右眼窩に至る腫瘍が確認された。翌日斃死したため，死後2時間で剖検を行った。

肉眼所見：腫瘍は右眼球後部に接して，眼窩内を埋める様に位置し，大きさはゴルフボール大であった。同腫瘍は視神経孔，頭蓋腔へと達し，トルコ鞍上部を中心とした雀卵大の腫瘍と連続していた。腫瘍の大部分は結合織様被膜で覆われており，弾力ある硬度があった。眼窩部・トルコ鞍上部の腫瘍の断面は灰白色充実性の小葉構造を呈しており，とくに後者では出血・壊死性変化が強かった。

組織所見：提出標本の腫瘍はやや厚い結合組織，一部には紡錘形細胞の増殖部により区画され，大小の小葉構造を呈していた。小葉内は円形～楕円形で，比較的濃染する核と泡沫状の比較的豊富な細胞質を

有する細胞で構成されていた。これらの細胞境界は不鮮明で，核異型が強く有糸分裂像もしばしば認められた。所によっては巨細胞形成が見られた。小葉内の大半は，これらの腫瘍細胞が，び慢性に密に増殖していた（写真1，HE，×280）。一部には血管の発達した細い結合組織に区画され，一～数層の腫瘍細胞から成る管腔様構造を示す部位や（写真2，HE，×280），内腔に好酸性漿液状物を容れる部分も認められた。これらの腫瘍細胞の大部分はACTH陽性を示した。電顕観察では細胞質内に分泌顆粒（写真3）と多数の粗面小胞体を認めた。また細胞によっては層状の粗面小胞体（写真4）が認められた。

診断および考察：免疫組織学的並びに電顕的に，本例は下垂体腺細胞由来の腫瘍であり，分泌活性の高い細胞から成る腫瘍であることが示唆された。本腫瘍は下垂体より発生し，視神経から眼窩に至ったと考えられ，診断は犬の右眼窩における下垂体腺癌の片側性浸潤巣とした。